

続・好仁会はなぜ「好仁会」という名前になったのか

——これが真相か——

一般財団法人好仁会理事長

赤塚義英

1. はじめに

一般財団法人好仁会は、2022（令和4）年3月をもって創立100周年を迎えました。コロナ禍の渦中であって、日頃お世話になっている関係の皆様を招待しての記念式典を挙行することは断念せざるを得なかったですが、せめて形のあるものを遺そうと「創立100周年記念誌」【写真1】を編纂し、同年7月に発行しました。

この「記念誌」の巻末に、「好仁会はなぜ『好仁会』という名前になったのか」と題する拙文を掲載させていただきました。全国の国立大学附属病院には設立の時期や事業内容はまちまちですが、東大の好仁会と同様の財団法人が設置され、それぞれの大学病院のロジを担っています。北海道大学の協済会、東北大学の辛酉会、岡山大学の積善会、九州大学の恵愛団・・・など、それぞれが個性的な名前を名乗っており、各財団の創設者や命名者の強い思いや希望、哲学などが反映されたものと思われます。いくつかの財団では、ホームページやパンフレット等にその由来が記載されているのですが、わが好仁会の場合これが全く分からないため、調査を行った経緯をしたための文章です。調査の結果としては、好仁会の名前の由来をズバリ解き明かしてくれる資料は見つからなかったのですが、最後にひとつの仮説を提示しました。

仮説：日本の民間信仰で台所や竈（かまど）の神様とされる「荒神さま」の「こうじん」を当て字で「好仁」としたのではないか

これは、「財団組織の賄所（好仁会の始まり）」という「東京大学医学部百年史」の記述にヒントを得たもので、私としてはそれなりに信憑性があるのではないかと考えていました。

2. 仮説に対する反響

「記念誌」を発行した後、多くの方々からお手紙やメールを頂戴しました。それらは100周年を迎えた好仁会に対する祝辞が主なものであり、ありがたく目を通させていただきました。巻末の文章をお読みになった感想を寄せてくださった方も何人かおられます。

匿名になりますが、そのうち2つを紹介させていただきます。

ひとつは、東京大学名誉教授のS先生から。

「好仁会」の命名由来の探訪は、苦勞されたにもかかわらず、ついにこれという明確な結論は得られなかったようですね。詳しい作業経過が書かれていますが、これはこれから調査を始める人の参考になるでしょう。学問の世界でも、調べてもついに分からないということはしばしばあり、その経過を明らかにすることは、確実に後に続く研究者を裨益します。

試しに、現在の中国で最も権威のある『漢語大詞典』という、全10巻の分厚い辞書を検索してみました。が、「好仁」という言葉は出てきませんでした。中国史上、「好仁」という成語は存在しないようです。

よく「医は仁術なり」と申します。『漢語大詞典』によれば、明の時代に、「医術」の意味で「仁術」という言葉が使われていたようです。このあたりが「好仁会」の名前の由来と関係があるのかもしれませんが。

もうひとつは、某大学の病院財団の〇理事長から。

日本の社会一般では、様々なことに古代中国の思想家の格言や古書等から引用することが多々行われており、また「名は体を表す」との故事があるとおり、名称には期待を込めて格調高い荘厳な名前が付けられるのが一般的かと思います。

中国の思想家「孔子」によると、「仁」とは中国思想（儒教）における徳の一つで、主に他人に対する親愛の情、優しさを意味しており、人の最高最大の徳として孔子が教えの根本に据えていることであります。また、「医は仁術なり」とも言います。旧東京帝国大学が「仁」を志向（好む）する大学・病院でありたいとの願いと、このような医師の養成を目指すことの決意として、「仁」を基本に据え、医学部、病院を支援するために設立される法人の名称に、上記の思いを託し「好仁会」と称したのではないのでしょうか。

いずれも誠に示唆に富むありがたいご指摘でした。お二方とも「医は仁術なり」ということを仰っていることが印象的です。もとの拙い文章に対し、このように丁寧な返信をくださったお二方には、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

3. 論語

私は、仮説の中で「こうじん」という音にできるだけ簡便でかつ良い意味の字を当てたのではないかと、「好」は「好ましい」の意、「仁」は「慈しみ、おもいやり」の意で採用されたのではないかと記していました。そのため、お二方からのご指摘の「医は仁術なり」は、当初はこの「仁」の字を採択するところの補強になると思っていました。しかし、「仁」とは人の最高最大の徳として孔子が教えの根本に据えていることであるという〇理事長のご指摘が心に残り、このことについてもう少し考えてみる必要があると思うに至りました。

孔子が説く「仁」とは何か。そのためには、「論語」を繙くことから始めなければならぬ。ぼんやりとそう思いながら、なかなか前に進むことが出来ずにいました。そもそも私は、恥ずかしながら未だ「論語」を読んだことがありませんでした。二千年以上昔の中国の思想

家・孔子 (B.C.552~B.C.479) の没後、門人たちの間でバラバラに伝えられていた言行録が徐々に整理され、漢の初め (紀元前2世紀) 頃に集大成されたものが「論語」であると知識として知っていても、とっつきにくく食わず嫌いを貫いているうちに馬齢を重ね今日に至ってしまったのでした。

「論語」は「大学」「中庸」「孟子」となる四書の筆頭として、中国はもとより我が国の先達の必読書であり、教養の中心でもありました。現代においても人生訓、処世訓を読み取り、「論語」を生き方の指針とする方も多くいらっしゃいます。これほど長きにわたり多くの人々に愛読されてきた理由は、『論語』の内容そのものに、いつまでも人々の共感をよび、新しい歴史の進展をうながすような、そうした不滅の古典としての価値があるからに他ならない (金谷治訳注「論語」岩波文庫：はしがき) のでありましょう。

一昨年 (2021 (令和3) 年) のNHKの大河ドラマ「青天を衝け」の主人公・澁澤栄一翁には「論語と算盤」という著書があります。明治6 (1873) 年、当時33歳の澁澤は明治新政府の大蔵省の官僚として予算編成をめぐる井上馨、大久保利通らの対立に巻き込まれ、井上とともに大蔵省を辞職してしまいます。官界を辞した澁澤は、第一国立銀行の総監役に就任しますが、この時、君のように才能ある人間が官を去るのは惜しいし、私利私欲に走りがちで民業にたずさわるのは無謀だと忠告する友人があり、それに対し澁澤は次のように答えたそうです。

「ご忠告はかたじけないが、いささか信ずるところもありますから、思った通りにします。
(中略) もし人材がみな官界に集まり、才能なき者ばかりが民業にたずさわるとしたら、どうして一国の健全な発達が望めましょう。

実をいうと、官吏は凡庸の者でも勤まるが、商工業者は相当才腕ある者でなければ勤まりません。しかし今日の商工業者には実力ある者が少ない。士農工商という階級思想の名残りで、政府の役人たることは光栄に思うが、商工業者たることに恥辱を感じる。この誤った考えを一掃することが急務です。何よりもまず商工業者の実力を養い、その地位と品位を向上させることが第一です。つまり彼らを社会の上層に位させて、徳義を具現するものは商工業者だ、という域にまで持ってゆかなければならないと信じます。

この大目的のために精進するのは男子の本懐です。私は商工業に関する経験はありませんが、『論語』一卷を処世の指針として、これによって商工業者の発達を謀ってゆこうと思います。」(澁澤秀雄著「新装版澁澤栄一」時事通信社 2019年6月25日初版 P197-198)

「論語」は、二千年以上昔の古典です。不案内な者がやみくもに近づこうとしても拒絶されてしまうような畏怖を感じます。そこで、手頃な入門書がないかと探してみると、書店にはいろいろと工夫を凝らしたガイドブックのような本が何冊も並んでいて、却って迷ってしまいます。何冊か購入したうち、結局、岩波文庫の「論語」(金谷治訳注 2021年1月第33刷) **【写真2】**を中心に読み始めました。原文と読み下しと現代語訳が対照して読めるよ

うに配慮されていて、これがちょうど手頃かなと思いました。

4. 「論語」里仁編

岩波文庫版「論語」の「はしがき」から引用します。

二十篇の内容は、ほとんどが断片的といってもよいような短いことばの集まりである。そして、その配列の順序にも格別の意味のないのが一般である。学而とか為政とかいう篇名でさえも、篇の内容のまとまった意味を示すものではなくて、ただ篇の初めの二字をとったにすぎない。こんな例は、おそらく他のどの国の古典にも見出しがたいものであろう。だから、いそがしい読者は気ままな拾い読みをすることも許される。自分の体験に照らして玩味していけば、それだけでもはっとして興奮を覚えるような何章かに出くわすはずである。しかし、もしいくらかの暇を得て落ち着いた通読をしていくなら、不思議なことに、そのとりとめのないばらばらな中から、孔子の人間像が次第に鮮明に浮き上がってくる。孔子をとりまく門人たちのありさまが生き生きと躍動してくる。そして、そこからかもし出される一種の人間の魅力が、ついにはわれわれの心をしっかりと捉えてしまうのである。

気ままな拾い読みが許されるという言葉に安心して、文字通り拾い読みをしていくうちにある章に目がとまりました。巻第二、里仁第四篇の第六章です。

里仁第四 06

子曰、我未見好仁者惡不仁者。好仁者無以尚之。惡不仁者其爲仁矣。不使不仁者加乎其身。有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者。蓋有之乎、我未之見也。

(読み下し)

子曰わく、我れ未だ仁を好む者、不仁を悪む(にくむ)者を見ず。仁を好む者は、以てこれに尚(くわ)うる事無し。不仁を悪む者は、其れ仁を爲す、不仁者をして其の身に加えしめず。能く一日も其の力を仁に用いる事有らんか、我れ未だ力の足らざる者を見ず。蓋しこれ有らん、我れ未だこれを見ざるなり。

(現代語訳)

先生が言われた、「わたくしは、まだ仁を好む人も不仁を憎む人も見たことがない。仁を好む人はもうそれ以上のことはないし、不仁を憎む人もやはり仁を行なっている、不仁の人をわが身に影響させないからだ。もしよく一日のあいだでも、その力を仁のために尽くすものがあつたとしてごらん、力の足りないものなど、わたくしは見たことがない。あるいはそうした人もいるかも知れないが、わたくしはまだ見たことがないのだ。」

金谷治氏の現代語訳だけでは少し分かり難いところもあるので、別の訳を参考に引用します。

孔子様がおっしゃるよう、「わしはまだほんとうに仁を好む者また不仁をにくむ者を見たことがない。仁を好む者なら最上だが、不仁をにくむ者も、自らは仁を為し不仁者の影響を受けない。それだけのことのできるものを見ないのは、残念なことじゃ。そしてそれがむずかしいことかといえ、けっしてそうではない。たとえ一日なりとも力を仁に用いようと志す者があるならば、其れにも力が足りない者は見たことがない。ことによつたらあるかも知れぬが、わしはまだ見たことがないわい。」(穂積重遠「新訳論語」講談社学術文庫)

穂積重遠(1883(明治11)年4月-1951(昭和26)年7月)氏は東京帝国大学教授(民法)、法学部長、最高裁判所判事を歴任し、東宮大夫兼東宮侍従長を勤めた人物で、澁澤榮一翁の孫にあたる方です。少年時代から祖父の影響で論語に親しみ、長じては家族に論語の講義(素読)をすることもあったと言います。祖父の代から受け継いだその家庭論語を将来の子や孫たちのために書き残しておこうと執筆したものが「新訳論語」【写真3】となります。

金谷治氏と穂積重遠氏の、この二つの現代語訳を合わせて読むと、これは孔子から弟子たちや初学者に向けた一種の応援メッセージだという印象を受けます。孔子は、誰でも「仁」の心を持つことができ、その能力を持っていると説いています。思いやりの心を持つことを嫌がるひとはおらず、もし「仁」の心を持つならば人としてこれ以上求めることはないとも言っています。仁を持つことを嫌がらないのであれば、仁を実践することになるのが当然であり、それは不仁者から邪魔されるものではないから不安に思うことはない。だからせめて一日でも仁を実践することから始めて、真の好仁者になれと勧めているのです。或いは「仁」を軽んじる世相を嘆いているとも見えます。

5. 好仁会の名称由来

「論語」の里仁篇に「好仁者」(仁を好む者)という語が見えました。ひととしての最上の徳である「仁」を好む者が集まる会、これこそが好仁会の名前の由来に違いありません。まさに某大学の病院財団の〇理事長が仰るとおりなのですが、相変わらず、誰がその名前を言い出したのかは謎のままです。好仁会の創設者である東京帝国大学医学部の三浦謹之介、入澤達吉、近藤次繁の3教授のうち特に漢籍に詳しいのは誰かを探る必要があるかもしれません。けれども、法学者であった穂積重遠氏のように漢籍の専門家でなくとも論語に詳しい人は、それが教養の中心であった昔はたくさん居たに違いありません。だから、誰が言い出したのかを探るのは至難のわざなのです。

ただ、私としては仮説として掲げた「荒神さま」を全く捨て去るのではなく、「論語」に

出てくる「好仁者」を「荒神さま」にも掛けて採択し、「好仁会」と命名したのではないかと考えています。

2023（令和5）年5月

参考文献

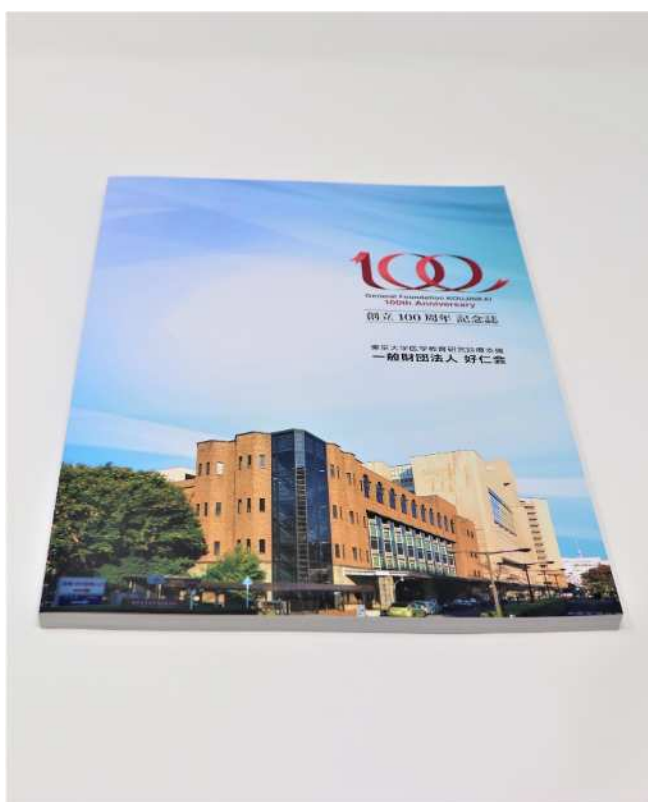
「論語」2021年1月15日第33刷 金谷治訳注 岩波文庫

「新訳論語」1987（昭和62）年7月20日第4刷 穂積重遠著 講談社学術文庫

「声に出して読みたい論語」2021年6月16日第5刷 齋藤孝著 草思社文庫

「新装版 澁澤榮一」2019年6月25日初版 澁澤秀雄著 時事通信社

「現代語訳 論語と算盤」2021年2月25日第49刷 澁澤榮一著 守屋淳訳 ちくま新書



【写真1】（財）好仁会 創立100周年記念誌



【写真2】「論語」金谷治訳注
岩波文庫



【写真3】「新訳論語」穂積重遠著
講談社学術文庫